

# 帽子の代わりにターバンを！

—ロマン主義時代のオリент旅行記に見る  
「変装」の役割の変遷—

畑 浩一郎

はじめに

「私たちの最初の関心事は、仕立屋を呼んでもらうことだった。宿屋の主人がすぐに一人手配してくれた。それは純血のトルコ人だった<sup>1</sup>。」1839年アドリアン・ドーザは、エジプトのカイロに到着した日の様子をこのように語っている。ドーザと同行の三人の仲間は、この地に降り立つや否や、奇妙な気詰まりを覚えたと言う。まるで「パリに来た南仏人」のような居心地の悪さを感じたと言うのだ。ほどなく彼らはその理由に気付く。それは彼らの外見にあった。ここエジプトでは、彼らのまとうヨーロッパの服装は否応なく人目を引き、人々を警戒させる。うさんくさそうに彼らを眺める人々の視線にたまりかね、旅行者たちは宿屋に着くと早速、土地の人々と同じ服を手に入れようとするのである。

しかし見かけを変えるということはそう容易くはない。翌日仕立屋がやって来ると、旅行者たちはまず帽子を脱がされ、あっという間にかみそりで頭を丸められてしまう。ターバンをかぶるのに頭髪は邪魔になると言うのである。手渡された鏡を見て旅行者は絶句する。「自分のこのような姿見るのは初めてであり、自分だと認めるのに苦労した<sup>2</sup>。」続いて衣服が手渡され、白い麻製の長衣と黒い外套に身を包む。足にはサンダル、腰には長剣をつける。これでどこから見ても立派なイスラム教徒だと喜ぶ旅行者はしかし、ほどなく試みはそれほど甘くないことを悟る。なぜならこのオリентの服を着て歩行することは、西洋人には恐ろしく困難なのである。頭の上で重いターバンがぐらぐらと揺れ、敷布のような長い服に足はからみつき、慣れないサンダルには絶えずつまづかされる。やむを得ず旅行者たちは宿屋の中庭で、

---

<sup>1</sup> Adrian Dauzats, *Quinze Jours au Sinai*, Dumont, 1839, p. 102. ドーザたちの旅の目的は、ルクソール神殿のオペリスクをフランス国家に委譲してもらうようエジプト太守ムハンマド・アリーに頼むことであった。

<sup>2</sup> *Ibid.*, p. 123.

あるヌビア人の男に音頭を取ってもらいながら、まるで歩き始めの幼児のように、よちよちと歩行練習を繰り返すことになる。

『シナイ半島での二週間』の中でドーザがユーモアを交えて語っているこうしたオリエント人への「変装」は、実はこの時代のレヴァント旅行記によく見られるものである。十九世紀の前半に近東を訪れる西洋人は、実際しばしば現地人の見かけを手に入れようと奮闘することになる。そしてその振る舞いは、よくも悪くも作者の個人的な経験を特権的な題材とする旅行記の中に記述されていくのである。ロマン主義時代のレヴァント旅行記において「変装」はまとまった考察に値するひとつの興味深いテーマを構成している。

本稿が検討するのはこうした「変装」の文学的表象の有り様である。当時の旅行記において「変装」はどのように描かれているのか、そしてこの行為の実践は文学創造の場でいかなる役割を持ち得るのか。これらの問題をさまざまな旅行記を例に考察していきたい。時代設定をひとまずロマン主義時代に据えるが、それはこの時期に「変装」の意義が顕著な変遷を見せるからである<sup>3</sup>。当時の旅行者が「変装」を試みた理由は実はさまざまで、そこにはそれぞれの個人的事情ばかりでなく、さらに大きな時代的な特殊性までもが映し出されている。「変装」にまつわるテキストの検討は、こうした時代背景に迫るひとつの道筋となる可能性をも秘めている。

そもそも「変装」という行為は、他人に「成り済ます」という点で優れて演劇的な性格を持っている。オリエントでの体験を元に作品を紡ぎ上げる旅行記作家にとって、それは豊かな文学的実りをもたらし得る仕掛けとして映ったことだろう。充実した顔ぶれの書き手たち——この時期、今日の視点から見れば時代を代表するような作家が次々とオリエントへ赴き、その旅行記を執筆したという事実を思い出そう——が語るさまざまな「成り済まし」の物語はそれぞれに興味深い。彼らにとって「変装」とはいかなる文学的価値を持つのか、これから見ていこう。

### 社会的記号としての服装

ここまで何度か「変装」という言葉を用いてきたが、まずこの言葉につい

---

<sup>3</sup> レヴァント旅行記における「変装」のテーマの現れはもちろんロマン主義時代で終わりを告げるわけではない。この潮流のひとつの結節点は十九世紀の後半、ピエール・ロチの『アジャデ』（1879）の中に現れるであろう。本稿ではしかしそこまで議論に含めない。

て説明を加えておく必要がある。我々が問題としている「現地人の身なりをすること」という行為は、この時代の旅行記では多く「*déguisement*」という言葉によって表されている。後に見るように、時代が下ると次第に「*affublement*」や「*accoutrement*」といった言葉も現れてくるのだが、ひとまずここで確認しておきたいのは、当初旅行者が現地人の服を身にまとったのは、まず何よりも「*déguiser*」する、すなわち「他人の目を欺く」ことが目的となっていたということである。「変装」という日本語が必ずしもこうした旅行者の意図を表すのに適当かどうかは定かではないが、ひとまずここでは暫定的にこの語を用いて議論を進めよう。

無論、人の目をくらすために服装を取り換えるということは、何もロマン主義時代のオリエン特旅行記に特有の現象ではない。西洋以外の地域を旅する場合、自らの素性を隠すため現地人の姿に身をやつすことはしばしば見られる。サハラ砂漠深奥の黒人の交易都市トンプクトゥへの潜入を試みたルネ・カイエはモール人に、また西洋人女性として初めてチベットのラサを訪れたアレクサンドラ・ダヴィッド・ネールは現地人の少年に変装している。住民の外国人嫌いで聞こえたこうした都市を訪れるには、変装によってその出自を隠すことは不可欠となる。

しかし注意しておかねばならないのは、十九世紀前半のオリエン特は決してアフリカ大陸の伝説の都市でもなければ、またダライ・ラマのお膝元でもなかったということである。地中海沿岸では西洋人の姿はありふれており、たとえ旅行者がヨーロッパのいでたちをしていたところで、カイエやダヴィッド・ネールのような生命の危険にさらされるなどということはほとんど無かったのである。こうした事情によって逆に、「変装」の意義はこの時代のオリエン特で豊かな発展を見せることになるのだが、あまり議論を先取りすることは控えよう。むしろここではこの行為の原初の役割、すなわち旅行者の身を守る「安全装置」としての「変装」が、この時代のレヴァント旅行記に描かれていないか、また描かれているとすればどのような形でののか、という問題をもう一度見直してみよう。

人が身に付ける服装に、ある種の社会的記号の役割があることに異論はないだろう。それは着ている個人の性差、階級、職業、信仰などに関するさまざまな情報を絶えず外部に発しているのである。服装が持つこうした情報開示能力は、異なる文明の中に置かれた場合、奇妙に単純化された形でその効果を発揮する。先ほどのアドリアン・ドーザの文章にもあったように、それは着用している人間の「他者性」をことさら強調することになるのである。

異なる国籍、異なる宗教、異なる文化。服装によって絶えず明らかにされるこうした情報は、それを着用している人間の「闖入者」としての資格を否応なく際立たせる。そしてこの「闖入者」の出現は、現地の人間を必然的に緊張させることになるだろう。その緊張が単なる「警戒心」のままでとどまるか、それとも明確に「敵意」の形を取るにいたるかは、個々の場合による。

ここで二つのテキストの比較を行なってみよう。これらは等しく、オリエントを旅した西洋人が発した服装にまつわる言辞だが、両者の書かれた時期には一世紀強の隔りがあることを指摘しておく。ひとつめは十八世紀初頭にルイ十四世の命を受けてオスマン帝国の首都コンスタンチノーブルを訪れた、植物学者トゥルヌフォールのものである。

我々はあちこち走り回って、町の見どころを見たものだった。フランス人の服装をして、腰には剣を帯び、髪粉を振ったかつらをかぶり、帽子を反り返していたが、もはやイスラム教徒に不快感を与えることはなかった。[...] 我々の日常の身なりを繰り返したことで、彼らは我々の有り様に慣れていたので<sup>4</sup>。

続いて紹介するのは、それから百年以上後 1830 年代にシリアのダマスカスを訪れた詩人ラマルチーヌの言葉である。

西洋の衣装を着たヨーロッパ人の到着が新たな騒擾のきっかけになるかもしれない、我々の移動の噂がダマスカスに届いて、我々を深刻な危険にさらすのではないかという心配がある。我々はできうる限りの用心をした。皆、非の打ち所の無いトルコの衣装を身にまとうのだ<sup>5</sup>。

見て分かるように、これら二つの言辞は互いに正反対の方向を指向している。トゥルヌフォールの文章がトルコの首都での西洋人の身の安全を強調するのに対し、ラマルチーヌのそれは逆にその危険性を示唆する。これら二つのテキストを引いたのはまず、当時の近東における西洋人の立場の曖昧さを示すためである。一般に時代が新しくなるほどレヴァントで西洋人は安全に過ごすことができると言われるが、事情がそれほど単純でないのはこれらの文章が示す通りである。しかしこうした歴史考証を超えた次元で、これらの文章にはいくつかの興味深い点がある。

---

<sup>4</sup> Joseph Pitton de Tournefort, *Relation d'un Voyage au Levant, fait par Ordre du Roy*, Imprimerie Royale, 1717, 2 vol., t. I, pp. 472-473.

<sup>5</sup> Alphonse de Lamartine, *Voyage en Orient* (1835), éd. Sarga Moussa, Champion, 2000, p. 448.

まずひとつには、オリエントでの西洋人の安全に関する考察は、不可避免的に服装にまつわるコメントに直結していくという事実がある。近東で西洋人がいかに安全に過ごせるかを説くトゥルヌフォールがその根拠として挙げるのは、母国の服装をしていても何の不都合もないということであり、またダマスクスの住人の外国人嫌いを恐れるラマルチーヌは、まず何よりも西洋の服装がもたらしかねない危険について言及する。これらの文章の書き手にとって服装の持つ象徴的意義は明らかであり、それゆえ自らの出自をさらけ出すヨーロッパ人の身なりをすることにはこのような繊細な配慮を見せるのである。

ラマルチーヌはダマスクスに近づくにあたり、西洋の服装を諦めトルコ人の格好をしたと述べている。この一文は、旅行者の身を守る「安全装置」としての「変装」が描かれる典型的な例となる。そこにはオリエントを旅する人間が間断無く感ずる潜在的緊張を読み取ることができるだろう。しかしそれは果たしてこの文章に限ったことだろうか。我々にはむしろこうした緊張は、トゥルヌフォールの文章、コンスタンチノーブルにおける西洋人がいかに安全に過ごせるかを強調する彼の文章にこそより鮮明に表れているような気がする。もし西洋の服装を着用していても何の不都合もないのであれば、それをあえて大仰に指摘する必要はないし、それをこのように強調してみせる彼の身振りにこそ、逆にある種の空元気のようなものが透けて見えるのだ。服装にまつわる言辞からは、時としてこうした旅行者の生々しい息遣いが伝わってくる。

### シャトーブリアンの変身

大局的に見れば、旅行者の身を守る安全装置としての「変装」は、ロマン主義時代のレヴァント旅行記からは次第に姿を消しつつある。異教徒の存在を示すヨーロッパの服装はかつてはイスラム教徒の激しい敵意の的ともなったが、時代とともにそうした衝突も次第に減っていく。確かに今見たラマルチーヌのような例はあるものの、この時代、旅行者が自分の身を守るという目的で現地人の姿に身をやつすということは稀になっていくのである。

ここで興味深いのはシャトーブリアンの事例である。我々が扱う作家の中でも早い時期にレヴァントを訪れたブルターニュ出身のこの作家の場合——彼の聖地巡礼の旅は1806年のことである——いまだ何を着るかという問題は時に切実となる。特殊な時代性が反映する彼の服装をめぐる言辞は

それゆえ興味深いものであり、「変装」の第二の意義に関する考察に移る前に簡単にそれを見ておこう。

一般的に言って、旅行記の中に現れる服装に関する記述は、通常それほど読者の注意を引くことはない。上着やかぶり物、靴やベルトなどに関する事細かな描写は時として冗長であり、また一読してそのイメージを具体的に思い浮かべることも困難である。それゆえこうした記述は多くの場合そのまま読み飛ばされる運命にあるのだが、時としてそこに、作品を読み解く上で思いもかけぬ興味深い情報が隠されていることもある。その例のひとつがシャトーブリアンの『パリからエルサレムへの旅程』の中にある。

場面は、旅行者がパレスチナ沿岸の小都市ジャッファから、いよいよ彼の旅の目的地である聖地エルサレムへ向かうときのことである。彼はこの町のカトリックの司祭からひとつの忠告を受けることになる。すなわち彼は出発する前に必ずアラブ人に変装しなければならないと言うのである。司祭によれば、もし西洋人の巡礼者が通過するなどという噂が周辺に流れたら、盗賊たちの襲撃を受けるかもしれないと言うのだ。旅行者は憮然となる。これからキリストの聖墓を詣でようというのに、イスラム教徒の姿に変身しなければならないのである。しかし身の安全には代えがたく、やむを得ず旅行者はベドウィンが着るヤギ皮の袖無しマントをまとい、夜のうちに人目を忍んで出発する。こうして彼は無事に目的地に到着することができる。満足した旅行者はさらに足を伸ばして今度はベツレヘムに向かうことにする。この行程のためにあるトルコ人のガイドが彼の案内につくのだが、このガイドは驚くことに、先ほどのジャッファの司祭とは全く正反対の忠告をするのである。

彼【ガイド】はまず我々、私とその召使いたちにアラブ人の服を捨てて、フランス人の衣装を身に着けさせることから始めた。以前はあれほどオリエント人に馬鹿にされたこの衣装は、今日では尊敬と恐れを呼び起こすのだ<sup>6</sup>。

シャトーブリアンによれば、この「尊敬」と「恐れ」は、かつてこの地を席捲したボナパルト率いるフランス軍に由来すると言う。トルコ軍に立ち向かうその兵士たちの勇猛果敢さは、現地の人々に強い感銘を与えた。それゆえ今ではパレスチナではフランス人の服装をしていたほうが安全になるのだ、と作家は誇らしげに語る。

---

<sup>6</sup> François-René de Chateaubriand, *Itinéraires de Paris à Jérusalem* (1811), dans *Œuvres romanesques et Voyages*, éd. Maurice Regard, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1969, pp. 983-984.

こうしてシャトーブリアンは状況に応じて、まるでカメレオンのように見かけを変えている。ある時は人目を避けるため現地人の姿に身をやつし、またある時は西洋人の身なりを誇示することで、住民たちに恐れを抱かせる。

しかし今後は旅行者の安全を確保してくれるのは、現地の服装よりもむしろヨーロッパの服装となっていくであろう。近東における西洋諸国の外交的、経済的、そして軍事的な影響力はこの時代急速に高まり、それと同時にヨーロッパの服装をしている人間はそれだけで、住民たちから一目置かれるようになるのである。現地人の身なりと西洋人の身なり。旅行記に現れる二つの異なる服装の描写は、作者シャトーブリアンが、新旧二つの時代をまたぐ過渡期に位置する旅行者であることを示している。

### 異文明世界へのイニシエーション

現地の人々の敵意から身を守る「安全装置」としての役割を終えた「変装」は、今後その意義を多様化させつつ、さらに旅行者たちに実践されていく。ロマン主義時代のレヴァント旅行記に見られる「変装」の次の役割は、立入禁止の場所に潜入するための手段としてのものである。

近東の都市には、外国人には近づくことすら許されない場所が多数存在する。礼拝中のモスク、奴隷市、地元民の儀式などである。このような場所に潜り込むためには、西洋人の身なりのままでは不可能である。そこで一部の機転の利く旅行者たちは、服装をオリエント人のものに換え、現地人に成り済ますことで目的を果たそうとするのである。

例えば 1818 年フォルバン伯爵はエジプトはカイロの奴隷市を訪れている。この人身売買の施設に近づくことは、当時は西洋人には固く禁じられていた。伯爵はそこでイスラム教徒の振りをすることで現地人の目をごまかし、この施設に潜り込むことに成功している。

着ていたイスラム教徒の衣服のおかげで、女性奴隷の市場をたやすく訪れることができた。バザールの商人たちのもとで、私はオスマンリ・シャー、すなわち北方のトルコ人として通ったものだった。そのことでトルコ語もアラビア語も流暢に話せないことを納得させることができたのだ<sup>7</sup>。

---

<sup>7</sup> Louis-Auguste Forbin, comte de, *Voyage dans le Levant en 1817 et 1818*, Imprimerie Royale, 1819, p. 80.

こうして現地人への変装は第二の局面に入る。『千一夜物語』のコントに登場するカリフよろしく、「変装」によって素性を隠した旅行者たちは、誰からも見とがめられることなく自由にあちこちを往来するのである。しかしそれは現地人の目から見れば、彼らの社会の禁を破ることでもある。このような「変装」はしたがって、先に見た「安全装置」としてのものと比べた場合、はるかに挑発的な性格を持っている。

フォルバン伯爵の文章にはひとつ示唆に富む事実が含まれている。すなわち、変装によって立入禁止の場へ潜入するためにはただ見かけだけ装えばよいというものではないということである。まず現地人の言語に通じていること、そしてできればその習慣をわかまえていること。この二つの条件を満たさなければ、取って付けたような変装などすぐ露見してしまうことであろう。それゆえ旅行者たちはこの問題にさまざまに頭を悩ませることになる。彼らの編み出す工夫はそれぞれに興味深く、ある者は見事に成功して現地人として通るのに対し、別の者は失敗し、西洋人であることが露見して危険な目に遭ったりしている。こうした旅行者と現地人との間で繰り広げられるイタチごっここの記述は、東方旅行記における「変装」のテーマの大きな魅力となっている。この点についてさまざまなテキストを紹介したいのだが、紙面の都合もあるので、ここでは例としてネルヴァルの『東方紀行』の主人公の場合を見てみることにしよう。

この作品では「変装」は重要なテーマのひとつとなっている。この物語の主人公は、幾度となく現地人に身をやつしさまざまな冒険を経験している。作者ネルヴァルの実体験が下敷きにされたこれらのエピソードには、現地人に扮する西洋人が感じる緊張と戸惑いがよく描かれている。しかしこの作品においてとりわけ重要となるのは、「変装」という行為にある象徴的な役割が与えられているということである。言い換えれば『東方紀行』の主人公にとっての「変装」とは、オリエントという未知なる世界に分け入るために必要となる一種の神秘的な「儀式」として位置づけられるのである。

『東方紀行』の中いくつか見いだされる「変装」に関する挿話の中から、ここでは象徴的な例として、旅行者がエジプトのカイロに到着した夜の出来事を取り上げてみよう。彼のこの町に対する第一印象は実は深い幻滅であった。昼間にロバに乗って眺めた通りはどれも埃っぽく、その惨めさは覆いようもない。『千一夜物語』の舞台を見つけにここまでやって来た主人公は、期待が大きかっただけに深い失望を覚え、この晩早々に床についてしまう。夢うつつの中で彼はしかしかすかな物音を耳にする。最初は夢かとも思うの



だが、音は次第に大きくなっていく。実はこの夜エジプト人の婚礼が行われており、参列者の行列が近所を通過していたのだ。好奇心に駆られた主人公は飛び起き、行列を観察しに行こうとする。しかし彼の話聞いた通訳のアブダラは、外国人が儀式に参加するなどとんでもないと諫める。諦めきれない旅行者が考慮の末考えつくのが、服装を取り換えエジプト人に成り済ますことなのである。

幸いなことに僕はマジュラーと呼ばれる、肩から足まですっぽりと覆うラクダの毛でできた外套を一着買ってあった。顎髭はすでに伸びているし、ハンカチをねじって頭の上に乗せれば、それで変装は完璧だった<sup>8</sup>。

行列は歌と踊りとともに、ゆっくりと道を進んでいく。現地の習慣や、とりわけ言葉をわきまえていない旅行者は、この行列の中で一体どのように振る舞うのだろうか。ひとまず彼も他の参列者たちに交じり、見様見まねで周りに動きを合わせていく。しかし危機は程なく訪れる。婚礼の家族の一員がいつの間にか近くに来ており、参列者たちに飲み物を配っているのである。旅行者はおののく。どのような挨拶をするべきなのか皆目分からないのである。しかし彼は隣の人の動作を急いで観察することで、何とかこの危機を乗り越えることができる。すなわちまず左手で杯を受け取り、次いで右手を胸、額、そして唇に当てて最後にお辞儀をすればよいのである。言うまでもなく、順番を間違えることは命取りである。

しばらくすると行列は婚礼が行われる家へと到着する。旅行者はさすがに中に入ることにためらいを覚える。そのようなことをすれば間違いなく口をきかなければならない羽目になるからである。しかししり込みをする彼に通訳のアブダラが、ある魔法の言葉を教えてくれる。それは「タイエブ」というもので、あらゆる問い掛けに有効な答えだと言うのである。

それはそこに付与する抑揚によってあらゆる種類の事柄を意味する単語である。 […] タイエブという言葉は、大変結構、よしよし、申し分なし、仰せの通りに、などの意味になる。口調ととりわけしぐさによってそこに無限のニュアンスが加わるのだ<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> Gérard de Nerval, *Voyage en Orient* (1851), dans *Œuvres complètes*, éd. Jean Guillaume et Claude Pichois, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1984, p. 264.

<sup>9</sup> *Ibid.*, p. 267.

この言葉を頼りに旅行者は大胆にも婚礼が行われている家の中へと入って行く。そこで彼は、興味深いエジプト人の結婚式の細部を心ゆくまで観察することになるだろう。

この夜の経験を通じてネルヴァルの旅行者が学ぶのは、オリエントという未知の世界に対峙する際の姿勢である。カイロの町が当初彼の目に退屈に見えたのは、それはただ彼が傍観者として外側から眺めていたからに他ならない。西洋とは根本的に異なるこの文明が持つ真に興味深い要素、例えば現地人の生活やその風習などについて少しでも知ろうとするのであれば、まず自分自身が立場を変え、積極的に彼らの生活に潜り込んでいく必要がある。つまりここでは「傍観者」から「当事者」への移行が求められるのであり、その移行を一時的ではあるが可能としてくれるものこそが「変装」なのである。『東方紀行』の主人公にとって「変装」とは、オリエントという異文明、本来西洋人には足を踏み入れることが禁じられている異世界の中を一目垣間見するために必要となる、ある種のイニシエーションの儀式にも喩えられるのである。

### 黒服の功罪

時代とともに「変装」の意義はさらなる進化を遂げていく。次に考察するのは、オリエントの異国情緒をもたらす源泉としての「変装」である。その実践にはこれまで見たような具体的な目的はもはや存在しない。それは純粹に美学的な効果のためだけに行われるのである。「変装」の第三の役割の登場である。

この段階の「変装」の意義を知るためには、まず当時の芸術家たちが共通して抱いていた、同時代の西洋人の着る「黒服」に対する嫌悪について触れなければならない。陰気でしかも窮屈なこの「黒服」は、しばしば作家たちの辛辣な攻撃の対象となっている。バルザックは例えば次のように言う。「我々はそれでは死んでしまっているのだろうか。分からない。しかし我々は皆、何かの喪に服している人たちのように黒服をまとっている<sup>10</sup>。」一部の芸術家たちにとって「黒服」は、当時の西洋社会が陥ったとされる精神的な逼塞、経済的發展の見返りに訪れた芸術活動の衰退を象徴しているように

---

<sup>10</sup> Honoré de Balzac, « Complaintes satiriques sur les mœurs du temps présent », *La Mode*, 20 février 1830, dans *Œuvres diverses*, éd. Rolland Chollet et René Guise, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1996, p. 741.

映るのである。

この陰気な西洋の黒服と好対照をなすとされるのが、オリエントの衣装である。色鮮やかで独特な形をしたこの服装は、近東独自の詩情の源泉として、多くの芸術家たちを引きつけることになる。画家たちはこぞって伝統衣装に身を包んだ人物を描いているし、また当時の旅行記には必ず、現地人の服装に関する詳細な描写が見受けられる。

「黒服」を忌み嫌う一部の芸術家たちにとって、何よりもおぞましく思えるのは、こうしたピトレスクな服装をした現地人の群衆の中で自分の西洋のいでたちが人目を引いてしまうことである。あたかも黒服を着た自分が、俗悪な西洋のブルジョア社会を代表しているような気がしていたたまれなく思うのである。こうした芸術家たちの感情を、テオフィル・ゴーチエは次のように代弁している。

このおぞましい現代の服を着ていると、自分が非常に惨めで、みっともなくまた醜く思えるので、たとえオリエントではそれを着ていた方が安全であるにしても、すぐさまそれを脱ぎ捨ててしまう。まるで仮面舞踏会のただ中に黒い燕尾服で現れたかのように、このまばゆい群衆の中で自分がしみになっているのが気詰まりなのだ<sup>11</sup>。

こうして芸術家たちは醜い西洋の黒服をうち捨て、敢然ときらびやかなオリエントの衣装に身を包む。ちなみにこれまで「変装」の意で使われていた«*déguisement*»という言葉に代わり、«*accoutrement*»や«*affublement*»といったやや皮肉の利いた言葉が現れてくるのはこの時期のことである。

オリエントのきらびやかな衣装は、芸術家たちにめくるめく幻想を覚えさせてくれる。近東の独特な風景がもたらす効果もあり、彼らは自分が西洋人であることを止め、まるで真のオリエント人に生まれ変わったかのような空想を楽しむことができるのである。いやそれだけにとどまらない。「変装」がもたらしてくれる幻想は時として、時間の遡及をも可能にしてくれることがある。ペイルートの町をレヴァントのいでたちで歩き回りながら、ネルヴァルの『東方紀行』の旅行者はこうつぶやく。

二世紀前にさかのぼるようなこの色とりどりの群衆と袖触れ合うのは驚きだ。

---

<sup>11</sup> Théophile Gautier, «*Voyage en Orient par Gérard de Nerval*», *Revue nationale et étrangère*, 25 décembre 1860, dans *Constantinople et autres Textes sur la Turquie*, éd. Sarga Moussa, La Boîte à Documents, 1990, p. 368.

まるで精神が時間をさかのぼり、過ぎ去りし時代の輝かしい過去が一時、蘇ったかのようだ。僕は本当に重苦しい国の息子、黒服を着て前世代の喪に服しているような世紀の子なのだろうか。僕自身ここでは変身して、観察しながらポーズを取り、ジョゼフ・ヴェルネの海洋画から抜け出てきた人物のようだ<sup>12</sup>。

オリエントの服装を身にまとうことはこうして、二重の意味で芸術家たちにとって貴重な体験となる。それはまず「黒服」が象徴する低俗な西洋のブルジョア社会から遠ざけてくれるばかりでなく、同時にまた過去へさかのぼることで、時間的にも彼らの生きる十九世紀から遠く引き離してくれるのである。時空を超えて、近代西洋社会から輝ける古のオリエントに旅行者を運んでくれるレヴァントの服装は、それゆえ芸術家たちにとって貴重な異国情緒の源泉となるのである。

しかし「変装」がもたらしてくれるこの高揚感は永遠に続くものではない。旅の終わりとともに芸術家たちは必然的にオリエントの服を脱ぎ、また元の西洋の服装に戻らなくてはならないだろう。「変装」によって生まれるこの幻想の限界を知るために、最後にフロベールとデュ・カン の例を見てみることにしよう。

1849年デュ・カンとともに近東に赴いたフロベールは、最初の寄港地であるエジプトのカイロから友人のルイ・ブイエに宛てて次のように書き送っている。

吾輩はと言えば、白い綿製で、房飾りがつき、説明すると長くなる仕立てのヌビア人の大きなシャツを着ている。僕の頭は後頭部の弁髪、審判の日にはマホメットはそこをつかんで人を連れ去るのだが、そこを除いてすっかり剃っており、赤いタルブーシュをかぶっている。その赤さたるや尻が出るほどで、最初のうち暑苦しくて僕は尻が出た<sup>13</sup>。

ロマン派時代の多くの作家たちと同様、フロベールもまた早くからオリエントを夢見ていた。十五歳の時に書いた小説『怒りと無力』の中で、すでに彼はこの灼熱の太陽の国に対する憧れを表している。長年の願いがかない、ようやくレヴァントに足を踏み入れた作家は、まず旅の始まりを服装を取り換えることから始める。それは彼にオリエントの持つ詩情を直接肌を感じさせ

<sup>12</sup> Nerval, *op. cit.*, p. 471.

<sup>13</sup> Lettre à Louis Bouilhet, le Caire, 1<sup>er</sup> décembre 1849, Gustave Flaubert, *Correspondance*, éd. Jean Bruneau, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. I, 1973, p. 537. 「タルブーシュ」とは近東のかぶり物のひとつのこと。

てくれるように思えるのである。

事情は同行のデュ・カンにとっても同様である。実はデュ・カンは五年前、一人で小アジアを旅した時すでに現地人の服装をすることに憧れを抱いていた。しかしこの時は結局その勇気を持つことはできなかった。『文学的回想』の中でデュ・カンは次のように語る。「マムーシの格好をする欲望と戦ったが、結局上着とびっちりしたズボンをはいてかしまっていた<sup>14</sup>。」しかしそれから五年後、彼は以前の気の弱さを振り捨て、フロベールによればどこから見ても完璧なオリエント人へと変身する。「僕たちはかなり東洋風な顔つきをしている。特に数珠をつまぐりながら水ギセルを吸っている時のマックスはすさまじい<sup>15</sup>。」こうして二人の旅行者は今後十五ヶ月の間、まるで真のイスラム教徒であるかのようないでたちで近東を旅するのである。

しかしこうした楽しみは、再び故国へ戻るのと同時に終わりを告げることになる。フロベールは旅の最終段階に、イタリアのナポリから友人のカミーユ・ロジエに宛てて、次のような皮肉めいた言葉を書き送っている。「ブルジョアと言え、僕もその一人に戻った。もうタルブーシュもないし顎髭もない。帽子をまたかぶっている。大体のところムッシューのいでたちだ。ああ僕の祖国、僕の生まれたあのノルマンディをまた目にするのは何と退屈なことか<sup>16</sup>。」旅の終わりに彼が頭から取り去るオリエントのかぶり物は、同時にまた彼がこれまで絶えず感じてきたオリエントのみずみずしい詩情をも持ち去ってしまう。「変装」のもたらす幻想はかくもはかないものなのである。

結局フロベールは、同時代にオリエントを旅した他の多くの作家たちとは異なり、彼の東方旅行記を刊行することはない。旅行中に彼が取った膨大なメモは、作家が死ぬまでその存在すらほとんど知られずに終わることになる。実はタルブーシュの代わりに帽子をかぶってフランスに戻ったフロベールは、今後新たな方向に彼の創作を向けていくのである。その題材となるのは、オリエントからの帰途ロジエ宛の手紙で彼が痛烈に皮肉った対象に他ならない。すなわち作家がこれから取り組むことになるのは、同時代フランスのブルジョア生活、言い換えれば、「黒服」が象徴するあの卑俗で現実的な世界なのである。ルーアン郊外で起こった痴情事件を題材にした『ボヴァリー夫人』

<sup>14</sup> Maxime Du Camp, *Souvenirs littéraires (1882-1883)*, éd. Daniel Oster, Aubier, 1994, p. 208.  
「マムーシ」とはモリエール作『町人貴族』に登場する偽のトルコ人の称号。

<sup>15</sup> *Lettre à Louis Bouilhet, le Caire, 1<sup>er</sup> décembre 1849*; Flaubert, *op. cit.*, p. 537.

<sup>16</sup> *Lettre à Camille Rogier, Naples, 11 mars 185[1]*; *ibid.*, p. 762.

の執筆が始められるのは、作家がオリエントから帰国して三ヶ月後のことになるであろう。

### 終わりに

ここまで十九世紀の前半を通して「変装」の意義がどのように変遷したかを考察してきた。それはまず旅行者の身を守る「安全装置」として始まり、次いで「立入禁止の場所へ潜入するための手だて」となり、最後にオリエントの「異国情緒の源」として捉えられた。もちろんこの三つの段階の移行は厳密ではなく、概括的なものに過ぎない。いずれにせよ「変装」のテーマはロマン主義時代のレヴァント旅行記で豊かに花開き、文学創造の場においてもまた無視できない役割を演じているのである。

最後にこの「変装」の意義の変遷は、また別の視点から見れば、この時代に生じたオリエント旅行の性質の変化をも映し出している、ということを描いて論を終わりたい。世紀初めにシャトーブリアンが聖地エルサレムに赴いた時、この旅行ははまだ冒険の要素を残していた。西洋人の身の安全はまだ完全には保証されておらず、旅行者は時として「変装」によってその素性を隠す必要があったのである。しかしそれから半世紀、フロベールとデュ・カンが行うオリエント旅行にはもはやそのような緊張感はない。彼らが現地人に扮しようとする時、それは安全面への配慮というよりはむしろ、芸術家の一種の「戯れ」として行うのである。「変装」の役割の変化に透けて見えるのは、ロマン主義時代に生じたオリエント旅行の急激な興隆と、そしてその大衆化に他ならない。